



■1. 目的、背景

島根県で有名な観光地として出雲大社が第一に挙げられであろう。出雲には、出雲大社の他にも西には稲佐の浜、南には神門通り、道の駅吉兆館など観光する場所は多々ある。それらから出雲大社までに至る道そのものが参道空間といえるだろう。これらの出雲大社の参道空間に着目し、ハレの場として観光する場所間に新たな歩行空間をつくりたいと考えた。

また、出雲大社特有の参拝方法があり、出雲大社の西にある稲佐の浜から砂を持ち込み、出雲大社にあるお清めをした砂と交換して持ち帰るという作法である。稲佐の浜は、神在月に全国の八百万の神々が上陸すると言い伝えられている浜である。現在、この作法に対応した参道空間については未整備であり、既存の道路を細々と利用している。本計画は、出雲固有の参詣作法に対応する参道空間をつくり、出雲市の都市の発展にも寄与する空間の創出を提案することを目的とする。



■2. 現在の参道空間

現在、参道空間として利用客が多い場所が出雲大社から南に位置する神門通りである。道路を挟み左右に飲食店などの店舗が並んでいる。参道空間では聖と俗を併せ持つ空間が多く、聖の要素である自然は出雲大社の境内地にも植樹されている松の木があり、境内地の雰囲気境外へ出す役割をしている。また、俗の要素は店舗や駅があることで商業化を促し、参道空間が成り立っている。近くの駐車場に車を置いたり、電車で来られる人が多く徒歩で移動している観光客が多く見られ賑わいを感じられる。



神門通り



神門通り前の大鳥居



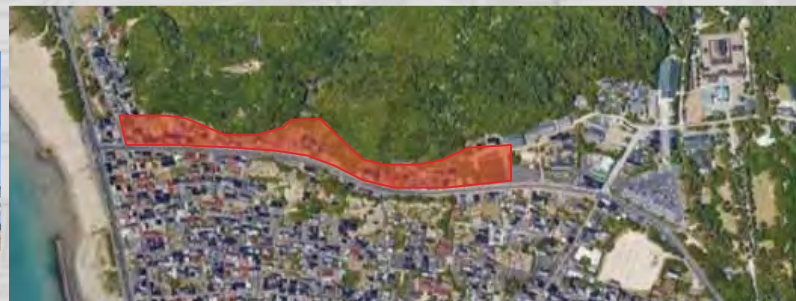
神門通り

■3. 計画敷地

計画敷地は、出雲大社から西側に位置する東西1000m程の国道431号線の道沿いを設定する。西には稲佐の浜があり、出雲大社から稲佐の浜に向かう隆起した最短の道である。北側には北山があり山の形状によって道路からの土地の広さが変化している。出雲大社から稲佐の浜までの空間が山の麓の住宅街であり、単調な空間になっている。



稲佐の浜



出雲大社

この歩行空間を歩いて観光することの喜びを感じられる空間とともに、新たなハレの場としてのストリートスケープの空間の必要性を考えた。

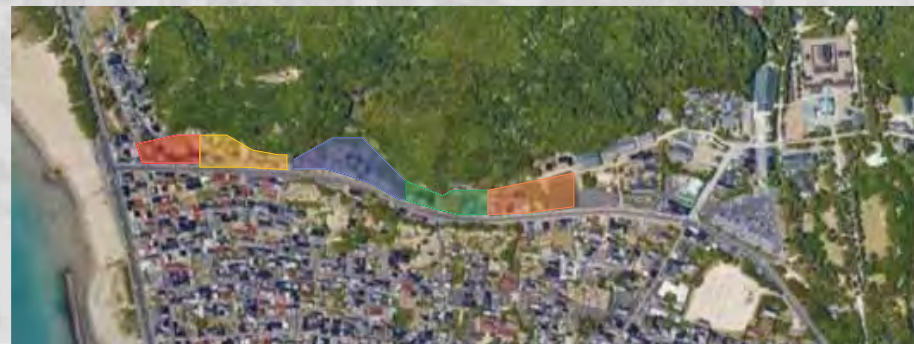
■4. 敷地構成

1) 段階的手法

計画は、クリアランス型の再開発的手法ではなく、現在の敷地や既存建物の状況を見ながら進める段階的手法を行う。現在の空地や空屋の状況、建物の老朽化の状況等を考慮して、第1期計画敷地から第5期計画敷地の5段階に分けて計画する。各段階は、全体が完成してなくても、それぞれの段階で完結できる計画とし、それぞれの表情が感じられる。全体が完成するのは数十年後として計画を進める。

2) 山との地形利用

431号線と山との距離で敷地の広さが違う空間がある。第3期計画敷地と第5期計画敷地が広がる。この広い敷地では店舗などを設け、人が集まるような空間にする。全体構成として出雲大社から稲佐の浜までの参道空間として歩く空間ではあるが、この2つの計画敷地は人の流れを留める空間にすることで人の流れに緩急をつけるようにする。



第1期計画敷地

第2期計画敷地

第3期計画敷地

第4期計画敷地

第5期計画敷地

第1期計画敷地



第4期計画敷地

第2期計画敷地



第5期計画敷地

第3期計画敷地



■5. シークエンス

シークエンスの要素として順序、連続しているものなど建築に置き換えると移動していくごとに景色、デザインが変化していく手法にも繋がる。また、エピソードも感知できるような仕掛けが出来るものであると感じる。実際に参道空間はシークエンス要素が入っているものである。出雲大社の参道空間は質的要素で感じることができ、本殿に近づくにつれ、広葉樹から針葉樹に変化している。この変化は境内地の雰囲気を出雲市街地に流し、本殿へと利用者を誘う役割を担っている。

この設計で樹木をモチーフにしたフレームにシークエンス要素を付け加え、境内地への誘う役割を担ってもらう。また、後に全体構成の説明があるが、建物にストーリー性を持たせ歩いて行くごとにストーリーを感知できるような構成を取り入れた。

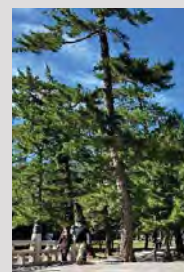
■6. デザインモチーフ

1) 聖の要素

デザインの要素として樹木をモチーフにした。参道空間に必要な構成の1つである聖の要素(自然)を出すために樹木を使用する。出雲大社の境内地に植樹されている“松の木”による雰囲気を出すためでもある。松は幹が斜めに伸びることが多く、ゆえに鳥居のように囲われる空間が生成され自然と道が出来る。今回の計画である出雲大社と稲佐の浜を繋ぐ歩行空間の計画に必要な要素になってくる。



樹木に囲われる歩行空間



樹木

2) 築地松

日本海側に面しており風が強い冬の季節風から建物を守る“築地松”が出雲平野に多く見られる。築地松は、出雲特有の文化の1つであり松の木を使い風から守っている。これらの特有の文化も合わせつつデザインを進めていく。



<http://kando.jumku.com/721/taijijimatsu/taijijimatsu.html>

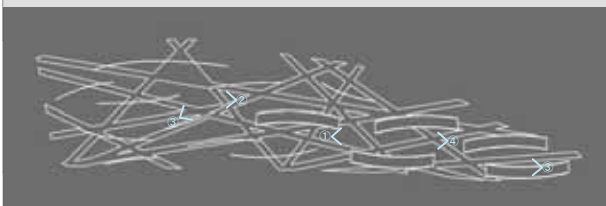
築地松

○第一、二空間



壁をつくり人の動線を視覚的に作り上げる。俗の要素の1つである“不整形”と自然の要素であるランドスケープを組み合わせた空間とする。第1の空間ではフレームの壁により視覚的に動線を作り出す。

第2の空間ではフレーム間から小空間を作り出している。この第1、第2から建物が整形的に成り立っていく様の始まりとなる。第2の小空間では休憩スペースとしての利用がメインとなる。



パス ①

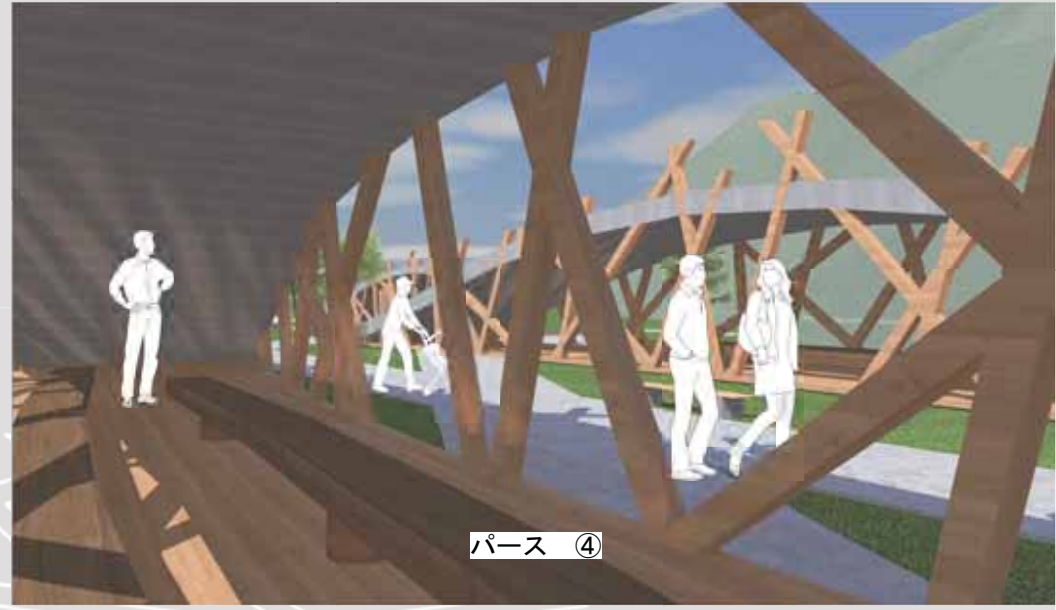


立面パス S=1/200

○第一、二空間



パース ②



パース ④



パース ③

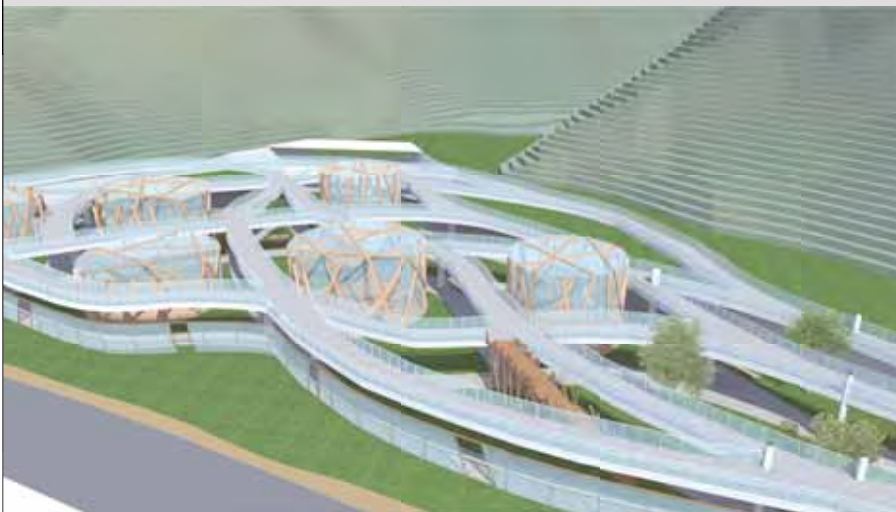


パース ⑤



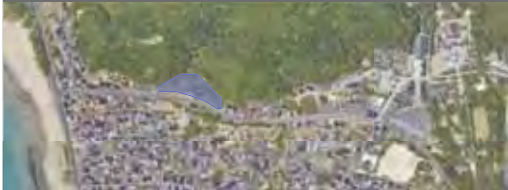
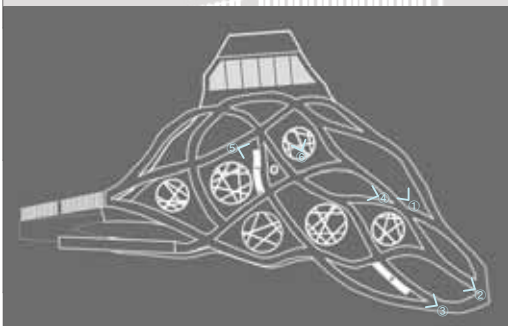
立面パース S=1/200

○第三空間



全体パース

この空間からデッキを設け、2層の歩行空間を出していく。2層目を作ることでレベルの変化を出し、普段とは違う視点から建物、自然を感じることができる。また、季節風の強い出雲平野だからこそ建物の高さから一つ抜けたレベルで遮る物も無く風を感じることができ、視点だけでなく肌で感じる事が可能になる。デッキを組み、人の滞在時間を多くすることが目的である。デッキ間にある囲われた空間では店舗や休憩スペースが入り、フレームが樹木の様子を表し、小空間の中と外で林の中にいる感覚を作り出す。



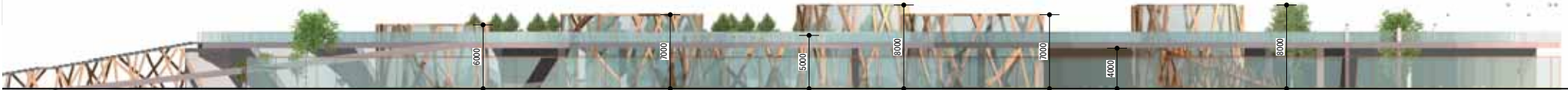
内観パース ①

この部屋では古代出雲大社の資料や出土された物のレプリカ、古代出雲大社の模型が置かれている資料室となる。天井には、出雲大社特有の絵である「八雲之図」がある。これは、出雲大社や大国主命の御威光が今後も未来へと限りなく続き、無限の広がりを持つという事を意味している説がある。



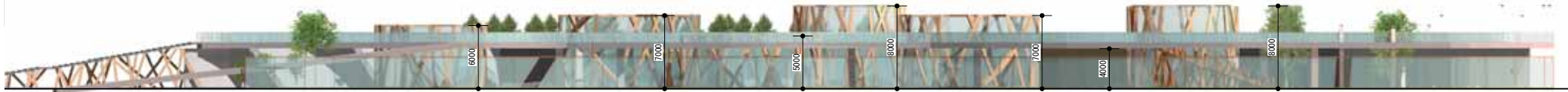
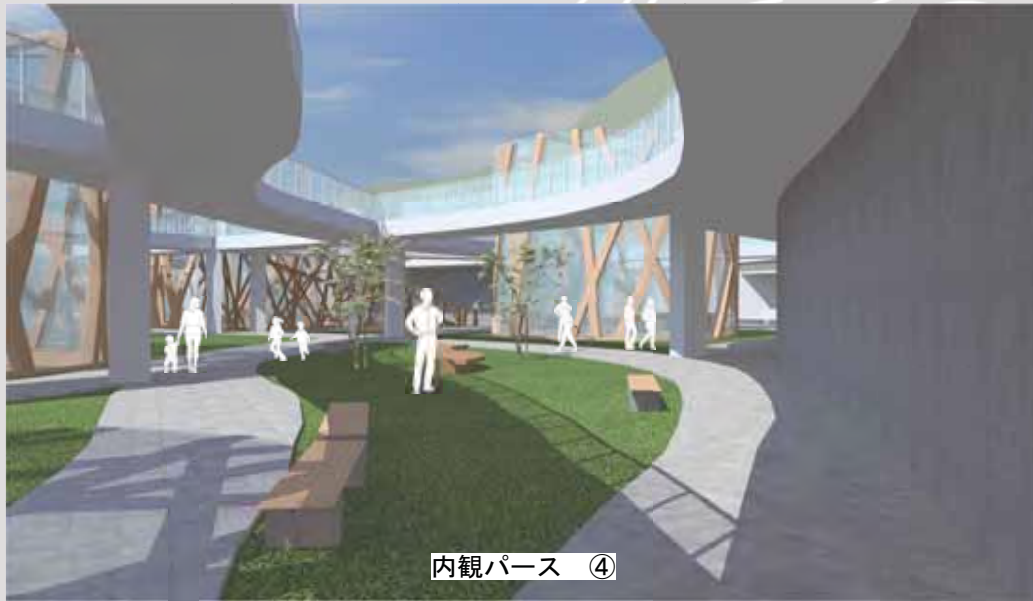
内観パース ②

デッキにより陰の暗さ、日が差し込む明るさのコントラストを作り出す。太陽の場所によって違う陰のでき方があり時間ごとで違った風景となる。

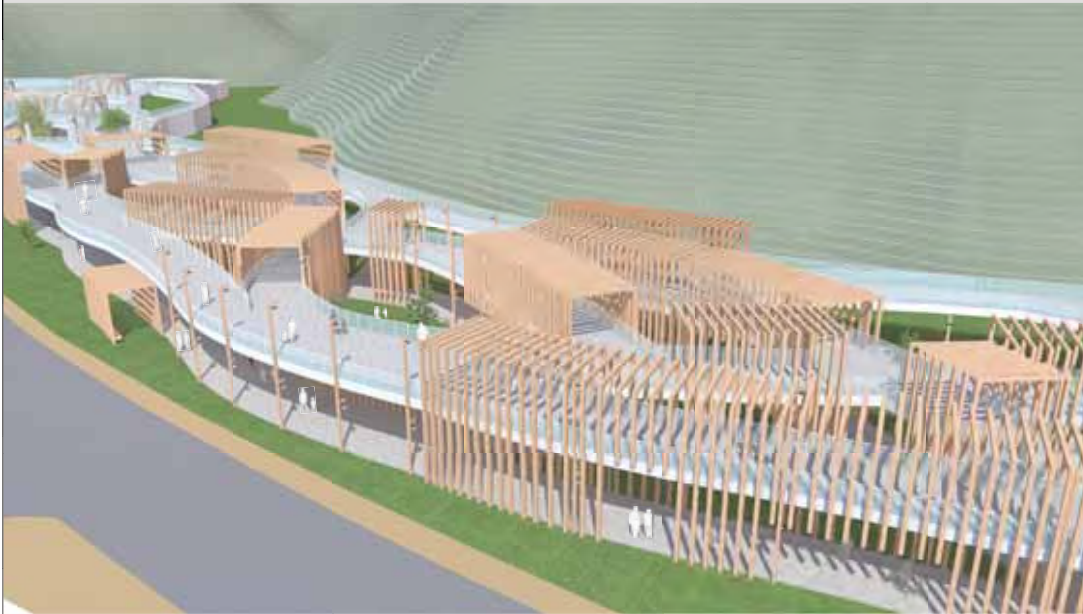


立面パース S=1/200

○第三空間



○第四空間



1階パース ①

第4期計画敷地では聖空間の始まりを表す。“整形”として配置されたフレームからアーチ(鳥居)が生成される。鳥居のフレームによって囲われた空間が視覚的動線を作り出し歩行空間ができ、鳥居と鳥居に囲われた空間では足を留める滞在空間の2種類の空間が作り出される。1階デッキ下空間では薄暗い空間で落ち着きを感じれる場所にした。

アーチ(鳥居)から動線が出来上がるのと同時に囲われる事によりフレームが視覚的に空間を作り出す。動線という役割も持ちつつ、滞在できる空間の生成として静と動の双方を織りなす可能性を引き出す。



1階パース ②



立面パース S=1/200

○第四空間

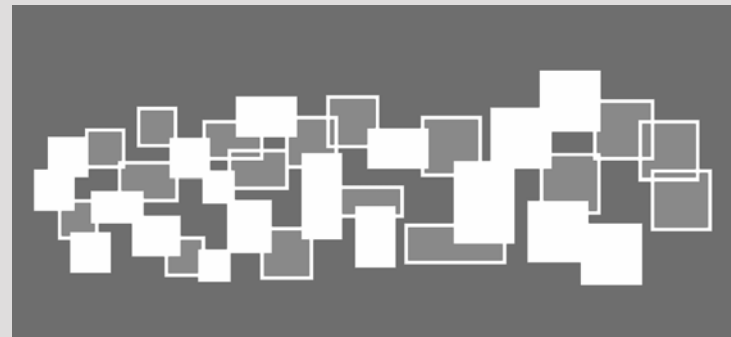


立面パース S=1/200

○第五空間



この空間は出雲大社に一番近いこの空間で聖の要素(整形)を強めたデザインにした。各空間ごとに店舗などを配置させる。第4計画敷地のデッキとの繋がりを出しつつ小空間どうしを繋げ動線を派生させていく役割を担う。不規則に配置した屋根により色々な場所、時間ごとで日光が入る時間の長さが変わってくる。



屋根イラスト

西の空間から東に向かうにつれ聖の要素が更に強くなり、まとまり、集約が生まれる。小さな四角が徐々に数を減らし大きな四角となる。構成要素のグラデーションがこの屋根と各空間のサイズのベースとなる。



1階内観パース ①

中央にある一本の大きな道から両サイドにあるブロック空間へ寄り道できる。商店街の良さである歩いて行けば行くほど違った店舗、風景の移り変わりを生み出していく。

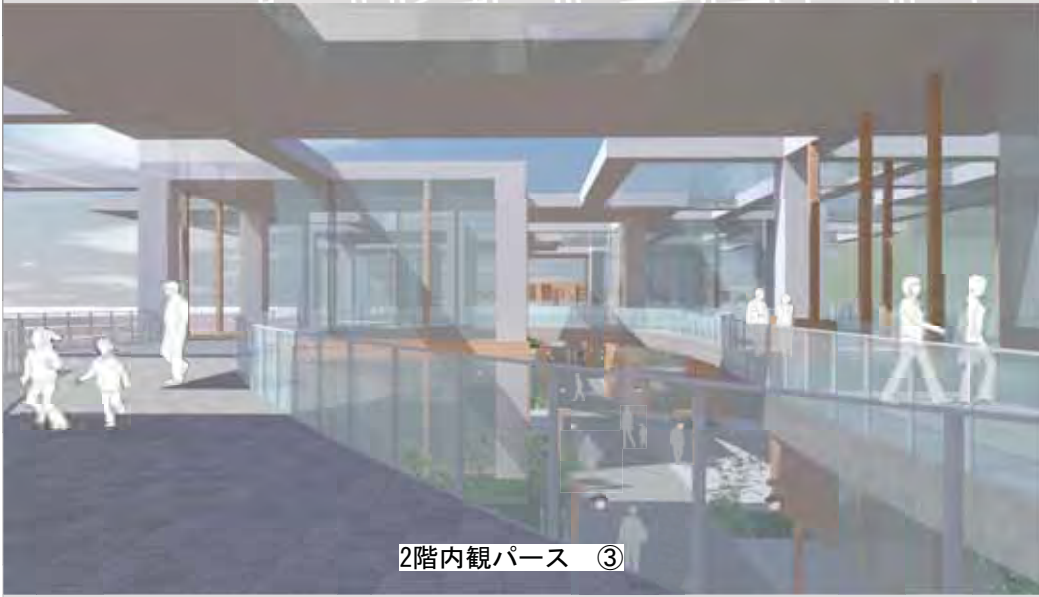


立面パース S=1/200

○第五空間



1階内観パース ②



2階内観パース ③



1階外観パース ④



立面パース S=1/200